

財団だより

多摩川

1995. 12 第68号



ダルマガエル (アマガエル科)
6~7月頃水田に多いが、川にも住み昆虫を食べる。背中に黒斑点がある。



多摩川の水の浄化と野点コーヒーのイベント ('95.11.11 撮)

■多摩川現風景■

(24) 多摩川の水で野点コーヒーを!

阪神大震災の教訓から、川の水を簡易浄化して緊急時の飲料水として利用できないかと、多摩川の二子玉川兵庫島でコーヒー試飲会が行われた。主催はサバイバル・ネットワーク「りばある」というもののしい名前のグループで、神戸で震災直後、奥多摩の水を運んでボランティア活動をした実績を持っている。このグループと武蔵工業大学の水理工学研究室の先生と学生による考案装置を用い、11月11日土曜日の午後、川原で実験と相成った。装置は簡単な仕かけになっていて、まずストッキング等の細かいネット状の袋に活性炭が砕いた木炭を入れ水洗いする。それをペットボトルの上半分をカットした器に入れ、器の下部にあけた穴からストローなどで取り出すという構造になっている。その水を再びろ過膜がセットされたビニール袋の中に入れ、下から出てくる水を飲むという仕かけである。細部にノウハウがあるもの

の、これで多摩川の水が安心して飲めるのかと思うのだが、今回は沸騰させコーヒー仕立てとなった。試飲の結果はまずくはないと表現しておくにとどめる。

神戸ではガスや電気が止まって煮炊きができなかったという報告もある。今後、様々なアイデアや商品が登場すると思われるが、普段から川の水はきれいにしておくに限るのではあるまいか。

●関連する財団の助成研究

〈学術研究〉

- ① 野川・仙川の浄化処理のための調査実験研究(野川における自浄作用と藻類生産力) 1979年 鈴木基之 東京大学 (No.19)
- ② 不飽和浸透流の汚水処理機構とその応用に関する研究(多摩川流域に設けた「毛管浸潤トレンチ」を研究対象として) 1982年 八幡敏雄 明治大学 (No.43)
- ③ 多摩川水系の汚染と自浄作用に関する総合的調査研究(生物学的にみた多摩川のあるべき姿) 1985年 近藤典生 財団進化生物学研究所 (No.78)

多摩川散歩

■ 国分寺たんけんマップ ■

— 農・自然・歴史 (南ブロック) —

国分寺市のまちづくりと農業を考える懇談会 渡辺善次郎

国分寺市は歴史と緑のゆたかなまちです。市民アンケートでも大多数の市民が、この歴史と緑に恵まれたまちに住みつけたいと答えています。

しかし、一見恵まれているように見えるこの緑の大部分は公園のようにいつまでも存続が保障されているものではなく、ほとんどが農家の所有する農地と雑木林なのです。もし農業がつけられなくなり、農家がなくなれば消えていってしまうものです。

ですから、市民の望む緑ゆたかなまちをつくるためには、どうしても農業のことを考えなければなりません。私たちの会は15年前から、そのための学習と調査をしてきました。その活動報告として『農のあるまちづくり』(1989年 学陽書房)という本も出しています。

今回はその活動の一環として、もっと多くの人々に、このまちの農業や自然や歴史を実際に目で見てもらおうと地図づくりをはじめました。市民でも意外に多くの人が自分の住んでいるまちを、あまりよく知っていないことに気づいたから

です。あらためて自分のまちを歩いて見てもらいたい。まちにはまだたくさんの素晴らしい自然や歴史遺産があり、活発な農業が営まれているのです。そうした事実を一人でも多くの人々に知ってもらいたい、これからのまちづくりを一緒に考えてもらいたい——それが私たちの願いです。

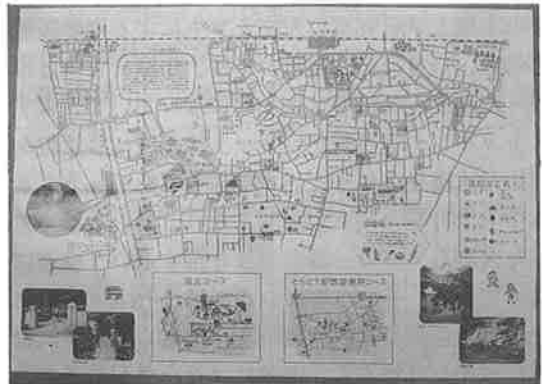
市内を5地区に分け、今回は中央線から南のブロックを作成しました。この地区には武蔵国分寺の史跡や日本百名水に選ばれた真姿の池の湧水やお鷹道などがあります。「歴史コース」「とれたて野菜販売所コース」を紹介し、「野川のルーツ」や「湧水」の図解、草花を使った遊びなどもめました。いまは西部ブロック編を作成中です。

マップをご希望の方は下記へご連絡下さい。
(1部50円です。)

〒185 国分寺市東元町2-18-36

渡辺善次郎

TEL 0423-24-3880



私と多摩川



笠取山遊歩道に巣箱かけ作業

'94. 11. 4 撮

田邊政弘(塩山市在住)

多摩川の上流で生れ生活してきた私、昔といいましようか道路は人馬の道、電気もない頃から生活してきました。水は流れ川の水を引き、下水も川には流さないでおりました。水源の源に住んでいても水はとうとかったようです。

昭和29年に自家発電により電燈が灯りました。ラジオによる文化が入ってきました。その後青梅街道が開通し、人馬から車社会と変わりました。

この頃までは本当に自然そのもので野山には山野草が咲きみだれ、「アツモリ草」もいっぱい群生していた。各家では花作りをする庭はなく洗濯物を干したり、収穫した物の干場としていました。

この地が開発による自然破壊ではなく、マナーの悪い人により自然が破壊されてしまいました。高山植物もたちまちなくなり、地域の人たちも自分の家の囲りに植えましたが、これも取られてしまいました。川には天然のやまめが沢山いました。土用丑の日には蛋白源として、親子でやまめ釣りをしたことも記憶していますが、今や、やまめより人の数が多いとも云われています。

春は山菜取り、これは子供が取るので十分でした。また、秋には茸取り、松茸のある場所は親子でも長男にしかある場所は教えないとも云われました。これも今は根こそぎ取ってしまう。ですか

ら地元の人が取ることでもできず、観光客に利用する人は他の地域に行って取ってくるような話も聞いています。

「山紫水明」なんという言葉は通用しなくなってしまいました。山河に入りましてもいたる処に缶やごみが散乱しています。この状況を見るにつけ私は種々の教育の場で、環境美化のマナーを身につけるよう話して来ました。

また、地元の児童生徒会でも春秋の2回にわたり缶・ごみ拾いもしたり、看板を立て注意を促しましたが効果はなしでした。なかには土の中にうめる人もおりますが、これもキツネにより掘りかえされて直一層見る目ありません。

多摩川の大自然が人間のマナーの悪さにより破壊されていくことに対し、私は開発によることより、人による自然破壊を直さなければ、増々自然破壊になると思わずにはいられません。

こんな話しも聞いています。昨年水道局が自然遊歩道を作りました。この歩道を利用して秋の探索に来たある団体が山小屋で弁当を食べその弁当からを全て置いて帰ったようです。それをかたづけるのに大変だったようです。管理人もこうした人には来てもらいたくないとつぶやいていました。

さて、地元の人たちの見方と一般の人たちの見方とその価値観が異なっているように思います。地元の人たちは毎日生活するところ、他の人たちは通り一辺という安易な考えでいる人が多いのではないか、この機会に、私は、多摩川の大自然を守るためには多くの人の協力がなければできないことと思っていますので、是非自分の手で自然破壊をなくそうとすることを実行してもらいたい。

私は、今街に住み、ふる里の山野で楽しみたいという気はあるが、荒れはてた現状では行きたくないというほうが先です。

何時の日か源流から大自然のすばらしい多摩川になることを願っている一人でもあります。

環境保護美化が多くの人の手でできるようなすばらしい日本国土になることを再度願って筆を置かせてもらいます。

甦れ！多摩川

■ 兵衛川を歩く ■

三 道 省 山 三 財 団 環 境 浄 化 課 員 研 究 員 助 手 山 道 省 三

八王子市街地の南、町田市に隣接する宇津貫町の小さな谷戸から北上し、湯殿川（浅川の右支川）に合流する川に兵衛川という細流がある。その名前の由来ははっきりしないが、兵衛（ヘイベ）は植物方言でイヌガヤとされ、ここにその由来があるのではないかという説がある。

この小さな川は住宅・都市整備公団による八王子ニュータウンの造成工事でその姿を全く変えようとしている。約28,000人の居住区域を造成するこの計画は、自然環境と都市生活の共存をテーマに緑地の保全や兵衛川的环境復元をめざしている。しかし、兵衛川の改修計画や現実に進行している河川改修の状況を見ると、すでに改修の終わった湯殿川や兵衛川下流部の構造と同じ、直線的で単純な断面構造になっていて、全くの排水路と言わざるを得ない。この河川は東京都が管理する川だが、10年以上も前に認可された中小河川改良工事計画が基本になっていて、当時の河川改修に対する考え方がそのまま踏襲されている。住宅・都市整備公団はこの川を何とか自然復元しようといくつかの試みを行っているが、今回の兵衛川歩きはその現場を見ようと思った。

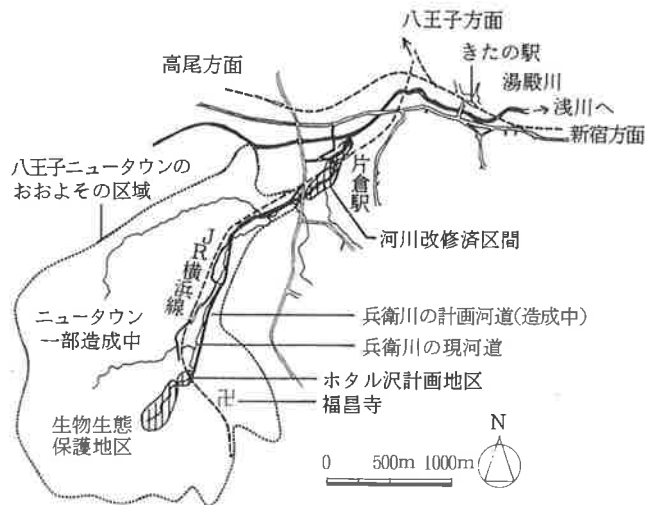
兵衛川は河川としての諸元は全長約2.8km、流域面積約6.0km²という小さな川である。流れはJR横浜線の片倉駅あたりから線路に沿ってさかのぼり、町田市境のいくつかの谷戸に分かれて水源を持っている。源流地区のうちJRと交差する地点から上流地区は、公団によって水源地区の保全と生物生態の保護・育成をめざすエリアとし、谷戸の水田放棄地や調整池を利用したビオトープ（生物生態保護空間）づくりがすすめられている。

JR線を越えた所は右岸側の山腹に、戦国時代中期の創建とされる昌福寺があり、兵衛川はその山すそを流れる。このあたりもすでに間知石によ

る深い水路に改修されようとしている。もともと川幅2～3mで深さも1～1.5mぐらいの蛇行の著しい小川であった。いまは、河川改修工事の荒々しい現場の中に所々かろうじて残っている程度で、すでに立ち退きの進む集落ともども様相が一変してしまっている。

昌福寺から工事が進んでいる川沿いを下ろうとするが工事用フェンスに阻まれ歩けない。改修河道は旧河道より西側を直進し部分的に河道が見える。そして、護岸の所々におおきな管が口をあげ、わずかな水が流れ込んでいる。公団は宅地造成にあたって谷戸部を中心に地下水を兵衛川に誘導する、集水パイプを埋設している。これは、雨水の地下浸透対策（敷地内で実験中）とともに兵衛川の通常時の流量を確保しようとするものである。さらに、河道内の自然復元や一部土による緩傾斜護岸、階段、魚道などの設置を考えているようであるが、自然の復元は極めて難しいものになるだろう。東京都河川部はこの3月「多摩河川環境計画」を策定し、従来の河川改修方針をより自然の豊かな川づくりに変えようとしている。兵衛川が従来型の最後の事例になることを切に願うものである。

案内図



《 “多摩川およびその流域の環境浄化に 関する調査・試験研究” 募集 》

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行ってきました。既に318件の研究に対して助成金を交付し、251件の研究成果を得ることが出来ました。

平成8年度も引き続き首都圏における「多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究」を下記のとおり募集いたします。

記

1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

- (1) 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
- (2) 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
- (3) 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・試験研究
- (4) 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査・試験研究。

◆公募締切日 平成8年1月16日
 応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。
 〒150 東京都渋谷区渋谷1-16-14
 (渋谷地下鉄ビル内)
 ☎(03)3400-9142 (助)とうきゅう環境浄化財団

年度別助成件数・助成金額

年 度	研究 区分	助成件数			助成金額 (千円)
		新規	継続	計	
昭和50年度 ～ 昭和63年度	A類	144	166	310	486,146
	B類	78	72	150	73,695
	計	222	238	460	559,841
平成元年度	A類	8	12	20	38,652
	B類	3	5	8	9,334
	計	11	17	28	47,986
平成2年度	A類	10	11	21	37,614
	B類	6	5	11	10,666
	計	16	16	32	48,280
平成3年度	A類	8	15	23	32,162
	B類	6	6	12	7,861
	計	14	21	35	40,023
平成4年度	A類	7	14	21	37,394
	B類	5	9	14	10,544
	計	12	23	35	47,938
平成5年度	A類	10	11	21	35,632
	B類	9	7	16	12,118
	計	19	18	37	47,750
平成6年度	A類	5	13	18	31,318
	B類	8	12	20	16,851
	計	13	25	38	48,169
平成7年度	A類	7	10	17	24,705
	B類	4	10	14	13,581
	計	11	20	31	38,286
合 計	A類	199	252	451	723,623
	B類	119	126	245	154,650
	計	318	378	696	878,273

※A類は学術研究、B類は一般研究

寄贈文献の紹介

●「川を制した近代技術」

— 近代日本の技術と社会 4 —

大熊孝編 1994年 (株)平凡社

本書は大熊孝(河川工学) 渡辺英夫(日本近世史) 石崎正和(土木史) 神吉和夫(土木史) 知野泰明(土木史) 松浦茂樹(土木計画) 各氏が執筆され、近世から近代の多様な治水・利水の技術を事例を基に歴史的に考察している。

●「玉川上水現況調査報告書」

編集・発行

東京都教育庁生涯学習部文化課 1995年

本書は東京都教育委員会から土木学会への委託調査をまとめたもので

- ①法面崩壊状況。
- ②橋梁構造と周辺景観の状況。
- ③既設横断管路の状況。
- ④上水付帯施設の構造。等について、位置図・写真を収録し、種々の提言をされている。

第9回 「多摩川実査」を終えて

10月26日、財団主催による「多摩川現地実査」が行われた。テーマは「多摩川下流域の自然と文化を訪ねて」である。昨年は中流域の博物館を視察したが、今年は、東京港野鳥公園、大田区立郷土博物館、旧六郷用水の整備状況、川崎市市民ミュージアムなどを訪れた。

当日は天気も快晴、多少汗ばむが秋風の爽やかな一日であった。大森駅をスタートして先ずは東京港野鳥公園に向かった。

大井埋立地に自然に野鳥を始めとする、多様な生物がすみついた地域を、地元住民が保存、回復をよびかけ、東京都が野鳥公園として整備したものである。現在も日本野鳥の会、ボランティアの有償、無償の協力によって運営されている。野鳥の種類も178種類を記録しており、野鳥観察の絶好の場所である。

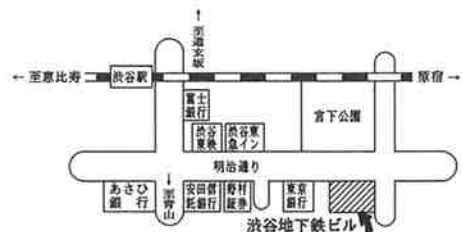
最近よく言われているビオトープ、—「生命」を表す接頭語 bio と、ギリシャ語で「場所」を表す topos の合成語で、「安定した生活環境をもった動植物の生活空間」—の一つであろう。

いくら自然空間とはいえ、バランスのとれた自然を維持するためには、これを支える人びとのたゆまぬ努力が必要である。自然の遷移にまかせると、野鳥の住めない状態になるので絶えず気を配って手をいれる難しさを語っておられた。筆者も丁度一週間ばかり前、住民と行政の協力により休耕田をトンボの楽園にした四万十川のトンボ王国を訪れたがレンジャーの方にまったく同じ感想を聞いた。ビオトープづくりには、つくること以上に、管理維持のシステムづくりが大切であるこ

とがよく分かった。次の目的地の大田区立郷土博物館は、大昔の大田区を紹介する土器、石器などの遺物、海苔養殖の歴史や、用具の展示、馬込文士村等、郷土としての大田区の特徴をだした落ち着いた博物館である。しばらく居ると、時が止まったような優雅な気持ちになるから不思議である。博物館を出て、旧六郷用水と、その沿道を訪れた。沼部から丸子橋まで約1キロほど、きれいに整備された用水と、緑道があり、散策には楽しい小径である。岸辺の緑を楽しみながら、水に泳ぐ鯉を見ていると心が安らぐ。石とコンクリートで固められていて、多少、人工的かなと思えるところもあるが、管理上、しかたがなかったのかなとも思った。丸子橋を渡って、バスに戻り、川崎市市民ミュージアムに向かった。

都市と人間をテーマにして誕生した総合文化施設で博物館、美術館、映像文化センターを複合した新しい型のミュージアムである。ちょうど企画展で、海と人生—川崎で海苔が採れた頃—を開催しており、学芸員の方の懇切丁寧な説明に参加者全員が聞き惚れていた。千葉中央博物館でも平日の時間に余裕のある時は、学芸員の方が説明、案内をお願いできる。博物館のこのようなサービスはたいへん贅沢なもので、機会があれば、是非、利用したいものである。バスの中では研究者の方々の魚類、低移動性動物群、絵画にあらわれた河川景観、里山昆虫等についての研究報告があり、住民団体の方の活動報告があった。充実した一日の疲れを武蔵小杉で懇親の一夕でほぐし、今回の多摩川実査を終えた。 芳村 重徳

- ・発行日 平成7年12月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL(048)831-8125